



21年前、初任で赴いた石川県立大聖寺高校は、加賀

の美しく、小さな町並みの中に溶け込むように存在する学校でした。生徒たちは、学校をもう一つの我が家のように愛し、教師も家族のように生徒を受けとめていました。

赴任早々、ある日曜の朝、用事があって私が学校に行くくと、無人のはずの教室に人の気配がします。見ると、数人の生徒が勉強をしていました。「家では落ち着いて勉強できないから学校にきた」と言うのです。大阪の都市部の高校を卒業した私には、休日、制服姿で学校に勉強に行く感覚が分かりませんでしたから、「この子たちは学校が好きなんやな」と感心したものです。「先生なら何でも分かるはず」と生徒が信じていることも驚きでした。「教えてください」と漸化式の難問を持つてきた時は、「地歴が専門の僕になぜ？」と戸惑いながらも、参考書を片手に懸命に解きました。それまで私がイメージしていた高校教師は、空き時間は専門教科の知識を深めて、時に学会

私を育てたあの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

生徒の信頼を受けとめる「覚悟」を学んだ

石川県立内灘高校 富井康博 TOMIYASUHIRO

生徒にとって、教師は最も身近な大人である。迷った時に歩むべき道を示し、また疲れたときには甘えることを許し、心を休ませてくれる存在でもある。若き時代、学校に寄せる生徒の期待の大きさと、それに向き合うことの責任の重さに気がついた石川県立内灘高校の富井康博先生。20年後も変わらない「教師としての覚悟」への気づきを語る。



右とみい・やすひろ 地歴・公民科。大聖寺高校で11年間勤務した後、加賀高校へ。9年間の勤務を経て、2010年度より内灘高校の教壇に立つ。

左いばやし・ながゆき 地歴・公民科。公立中学校教諭、石川県立図書館古文書課などを経て、大聖寺高校へ。同校で10年間勤務。その後、小松瀬領養護学校 現在、小松瀬領特別支援学校 校長などを経て、07年度、加賀高校校長。同年度3月退職。現在は、石川県金沢港大野からくり記念館館長。

先輩教師の言葉

時代や地域が変わっても本質は変わらない

元・石川県立加賀高校校長 IBAYASHI NAGAYUKI 伊林永幸



当時の大聖寺高校は、地域の文化の人々にとって文化の

発信地であり、一種のたまり場でした。私はたまたま学校の近所に住んでいたのですが、正月の三日、「学校を開けてください」と生徒数人が家を訪ねてきました。「いったい何をしますつもりか」と聞くと、「勉強する」と言うのです。「ほかの生徒にも声を掛けてしまっているから、ぜひ開けてほしい」と頼んでくるのです。また、普段から進路指導室は生徒の学習室のようになっています。いつまでも生徒が帰らないものだから、進路課の教師も全員彼らに付き合って毎日残っていました。今では考えにくいことかもしれませんが、それが、それだけ学校が頼りにされた地域であり、時代だったのです。富井先生にもずいぶん無理をさせました。

撮影◎石川県立内灘高校にて



私にとって、伊林先生の言葉はまさに財産です。先生から聞いた言葉で、今私なりに焼き直して言っていることが数多くあります。「担任との信頼関係」もそうです。後年、進路課長になった時、私は「進路実現のための十箇条」と題したプリントを作りました。ただし、そこには九つしか書きません。最後の一つはより印象に残るよう、「よく聞いてくださいね。それは『担任との信頼関係』なんです」とわざと口頭で言いました。いい言葉、熱い思いは何年経っても古くなりません。

私は伊林先生に、教師という仕事の要諦を教えていただきました。伊林先生に出会えなかったら、掃除時間中に専門教科の研究ばかりして、生徒のことを知る貴重な機会に気がつかなかったかもしれません。

今の勤務校の内灘高校には、今年赴任したばかりです。伊林先生が大聖寺高校でそうであったように、生徒のすべてを受けとめ、地域の人々が「我が子を内灘高校に入れたい」と思ってくれるよう頑張るつもりです。



生徒に愚直

社会状況が変わった現在、学校に頼らなくても受験に関する情報を得られるようになり、進路観や労働観の変化から進路先に対するこだわりもずいぶん薄れてきました。保護者の意識、教師との関係も変わりました。ただ、それでも、その地域で学校がどんな役割を担っているかを教師はとことん考えなければいけないと私は思います。教師を取り巻く環境も変わりました。富井先生と一緒に働いていた頃は、それこそ夜遅くまで学校にいることが可能でしたが、今はそれも難しい。生徒が勉強したいと言っても、定時にきちんと下校させなければいけません。時代とともにいろいろなものが変わりました。しかし、生徒一人ひとりと向き合うことの大切さは、いつの時代でも、どんな地域でも変わりません。富井先生は、それをよく分かってくれていると改めて思いました。

で発表をする、そんな職業でした。しかし現実の自分は、額に汗して生徒と掃除をしながら、日々の出来事から将来の夢まで語り合っている。だから、軽い気持ちで、同じ地歴科の伊林永幸先生に、「高校生ってもっと手のかからないものだと思っっていました」と言ったのです。それに対し、普段温厚な伊林先生は、意外なほど厳しい口調で私にこう言いました。「生徒、保護者、地域の要望に全力でこたえるのが地方公立高校の教師の役目だ。学会で発表するような知識よりも、今のキミには大切なものがある」。学校を心の底から信頼している生徒のすべてを受けとめる……伊林先生の覚悟に私は気がつきました。実際、伊林先生は生徒のすべてをよく把握していました。「あの子はきょうだいが多いから、私立への進学は難しいはずだ」「今、お父さんが病気で入院しているから、面談できめ細かくケアする必要がある」など、生徒の情報が見事に頭に入っていました。当初、私は「生徒とはいえ、他人の財布の心配までするのは行き過ぎではないか」と感じていました。そんな私の思



で、3年生にかかわるすべての教師が、300人を

いを察知してか、伊林先生は私にこう言ったものです。「これが現実なんだよ」と。

進路課長だった伊林先生のもとには、生徒がよく相談に訪れました。同じような志望、成績なのに、ある生徒にはA大学を強く勧め、別の生徒には「A大学はキミには合わない」と断言する。保護者の考えや経済状況、そして生徒の気質を踏まえて、指導を大きく変える姿を、私は何度も目撃しました。

赴任2年目に進路課に配属され、私は更に多くを学ぶことになりました。センター試験後に行われる出願検討の判定会議

超える生徒の出願先と個別学力検査までの指導内容を、丸2日間会議室に缶詰になって話し合う様子を見て、ここまでやるのかと驚きました。一人ひとりの生徒のために教師が一丸となるその様子は、若く、経験の乏しい私には感動的でした。特に3年生に何か変化があれば、担任はすぐに進路課に知らせるようになっていました。進路課は早急に面談を行い、その内容を担任に報告します。指導のブレを未然に防ぐためです。進路課としてリーダーシップを発揮しながらも、「最も生徒のことを考えている担任を立てることが、生徒の進路実現のカギだ」と伊林先生がいつも話していたことを今もよく覚えています。